

# 農政産業観光委員会 県内調査活動状況

1 日 時 令和2年10月29日(木)

2 委員出席者(7名)

委員長 渡辺 淳也

副委員長 桐原 正仁

委員 望月 勝 早川 浩 永井 学  
市川 正末 小越 智子

欠席委員 土橋 亨

3 調査先及び調査内容

(1)【産業技術センター・富士技術支援センター】

○調査内容(主な質疑)

問) 技術支援業務が3つあるが、こちらを利用している企業から一番多く依頼が来ている業務は何か。

答) 多くの企業は、主に製品の品質評価を受けるためにセンターの設備を利用している。いろんな設備があり、塗装製品の耐食性の評価、医療機器部材の開発にかかわる評価を求めている企業もいる。あとは電子部品関係の製品品質検査が多い。

問) 特に品質検査の関係では、企業から細かい検査の依頼があると思うが、そういった部分についても、こちらで全て対応できるのか。

答) 当センターで最新の分析機器等を用意しているが、当センターにないものは甲府のセンターの機器を使っている。指導や相談等についても、当センターで対応できるものは対応し、当センターでできない場合は連携して甲府のセンターが対応している。

問) 富士北麓・東部地域の伝統的な織物を活用した新商品開発とはどんなものか。また、繊維業界が低迷している中で、行政が抗菌の医療関連製品等の研究を先導していくべきで、どうしても既存の業者は既存の製品に偏ってしまうため、その辺をどのようにシフトしていくのか。

答) 重点化研究の富士北麓・東部地域の伝統的な織物を活用した新商品開発については、本県織物産業の特徴であるジャガード織物の独自技術、グラデーションや高精細な表現を可能とするデータ生成技術を生かして、製品開発を行っている。具体的に、傘や縄文シルクスカーフが、そういった技術で商品化されており、生地や製品の試作を行って、新たな用途開発、市場開拓に取り組んでいる状況である。それ以外に、経常研究でも光吸収発熱保温製品の熱移動特性。これは光で発熱するような繊維で、例えばニット帽やマフラーなど、光を浴びると発熱して温かいというものの商品開発や研究を行っている。

答) 医療関連製品について、当センターで特許を取った、抗菌用の銀を付着させた抗菌用マスクを、11月頃に販売する予定。既存の特許で使えるものは、どんどん技術移転していく。

問) 既存のもの以外に、抗菌カーテン、壁紙、パジャマ、防災頭巾等にも取り組んで欲しい。

次に、県として、カジュアルビズに合うネクタイやジャケットのプロモーションを先導してほしいが、どのように考えているか。

答) カジュアルビズについては、地元からも知事へ要望をいただいている。知事からもおしゃれなネクタイ、ジャケット等を消費者にアピールしたいという思いがある。具体的には答えられないが、今後検討していく。

問) 最後に、メディカル・デバイス・コリドーについて、静岡県ファルマバレーとこの研究所との医療機器の開発に関する進捗状況と今後について伺う。

答) 昨年度まで、犬や猫などの小動物用のインプラントの開発・製造して販売している企業と共同で研究を行った。疑似骨を使った評価をし、医療関係者にも興味を持っていただいている。

問) ここのセンターが静岡のファルマバレーと、メディカル・デバイス・コリドーの関係で関わりがあるかという質問。

答) 先日、沼津の工業技術センターがファルマバレーの方と同席で視察に来たが、具体的にどうなっているという段階ではない。

問) 富士技術支援センターと甲府技術支援センターのすみ分けは。

答) 富士は従来繊維を中心にずっと支援している。昭和61年から機械電子技術部ができた。富士北麓・東部地区はプラスチックの産業が集積している。プラスチックの製品が富士工業センターの支援の中心で、そのほか、機械電子関係は甲府のセンターと連携をしながらやっている。甲府のセンターでは、宝飾関係やワイン業界に力をいれている。富士のセンターは繊維を中心に、繊維関係とプラスチック業界を支援している。

問) 甲府技術支援センターとの連携として、富士技術支援センターで研究した技術的な連携や、情報提供は行っているか。

答) 連携は密にとっている。例えば、研究成果発表会は、富士技術支援センターの職員が甲府技術支援センターで発表するなどしている。

問) 富士技術支援センターと甲府技術支援センターでは地域が違うため、当然受ける要望が変わってくる。今後も、甲府技術支援センターと連携を密にとり、技術の情報交換を積極的に行いながら、新たな産業の発展に結びつけていただきたい。

答) 甲府技術支援センターの職員と情報交換し、密に連携をとって研究開発を進めていく。

問) 富士技術支援センターの利用状況の件数、人数、どこから来ているのか、資料があったらいただきたい。また、職員が何人いて、どんな研究、誰が何に携わっているのか、基礎的なデータがあればいただきたい。

それから、機械があっても、やはり研究する頭脳が必要だと思う。例えば山梨大学や、企業の方々と連携して開発しているのか。開発や、研究をするためにどのような方々が携わっているのか。また、職員がどういう待遇で、研究費がどのくらいか教えてほしい。

答) 富士技術支援センターの職員は、行政職1名、研究職14名、プラス会計年度任用職員が3名、合計18名体制でやっている。令和元年度の設備使用実績は、4,887件。利用料収入では832万9,000円。依頼を受けて試験をする依頼試験の検査件数は、1,776件。収入ベースで159万6,000円となっている。

問) 1年間で約5,000件、2つ合わせると7,000件近く受け入れているということで、郡内地域で非常に必要な施設だということがわかる。研究職14人は、すべて正規の職員で、ずっと研究されていると思うが、どんな研究をするのか、どういうことを着眼点にするのか、医療や、ファッションのことも含めて、多様な方々、例えば企業や、大学、病院の先生方などと連携した研究開発は、定期的に話し合いをしているのか。

答) 定期的な話し合いはないが、普段から技術相談やさまざまな問題の相談を受けている。企業独自では解決できない問題等については、企業や大学と共同でやりながら、新しい研究テーマを立案して研究を進めている。

問) 新しい産業、新しい研究に基づいて、新しい技術を開発していく中では、いろんな企業、それから大学の既存の研究職の方々、また新しい研究員の方を招いて発展的に進めていかなければ続かない。そこには予算をしっかりと確保していただき、人的な予算獲得もぜひお願いしたい。

答) 職員もここで研究しているばかりではない。企業の巡回指導の中で、新しい課題、企業の要望等を聞いている。また予算もなるべく確保していく中で、研究、それから技術移転等につなげていく。

問) 県内には県立の工業高校や産業技術短期大学校があるが、教育機関との連携について、現状を教えてほしい。

答) 継続的に工業高校や総合学科高校との連携は行っていないが、隣にある吉田高校理数科の生徒が、毎年複数回こちらに来て学習活動の一環として研究を行い、その成果を校内で発表している。また、教育機関から要望があれば、いつでも職員が出向いて、織物等の話をしていきたいと思っている。

問) 要望があればするのではなく、こちらから教育機関に最先端の検査や、機器があることを働きかければ、理系に進む生徒たちにいい刺激を与えられる。甲府技術支援センターも富士技術支援センターも素晴らしい施設であるため、しっかり県内の高校生、短期大学生に刺激を与える機会をつくっていただきたい。

答) 貴重な意見をいただいた。今後、実現できるよう努力していく。

問) 過日新聞等でも、知事がビジネスカジュアルの問題で、誤解を招くような受け取られ方をしているということで、ネクタイはおしゃれの一つであるため、富士吉田の繊維関係を強力に支援していきたいと言っている。知事から部局長に対しどのような指示があり、部長としてはそれをどのように受けとめているのか。

問) 知事はノーネクタイと言っているわけではなく、県職員としてよりおしゃれにしっかりと感性を研ぎ澄ませて、それを産業振興に生かしていくという趣旨で話をした。全庁的にこの趣旨が正しく伝わるように、庁内にもそれを促している。やはり我々としては、産業振興を少しでも前に進めたいため、6月補正で繊維関係のさまざまな施策を打ち出した。この富士技術支援センターも地元のプロジェクトも一緒に連携しながら、産業振興をしっかりとやっていきたい。また、県職員自体もそういったファッションセンスを研ぎ澄ませていきたいと考えている。

また、きょうは委員の皆様からいろいろな御指導をいただいたところである。やはり今、コロナで非常に厳しい中にあるため、しっかりと企業の皆さん、地元の皆さんのニーズを受けとめて、富士と甲府のセンターが一体となって、産業界あるいは県民の皆様の期待に応えられるように頑張っていく。

問) 県でも地元の企業と地場産業をしっかりと支援し、富士の事業者と連携体制を取って新製品を開発したり、また特許を取ったりする中で、地元の企業と強力な体制をとりながら、共同で進めていくようお願いしたい。



※ 富士技術支援センターにて概要説明を受け、質疑を行った後、施設内の視察を行った。

## (2) 【意見交換会】

- ① 出席者 女性農業者の方々
- ② 内 容 「山梨の農業の課題と振興策について」

○主な意見

議 員) 山梨県に対しての要望や、一番お願いしたいことは何か。

出席者) 新規就農者にとって農地の確保が一番ネックになっている。空き農地は結構あ

るように見えるが、なかなか新規就農者まで回ってこないのが現実である。例えば、リタイアされた農家さんと県や市が連携して、荒れた農地を整備し、棚の修繕までして貸していただけるような流れがあれば、新規就農者は仕事がしやすくなり、スタートするきっかけになると思う。

出席者) 一番の問題は高齢化だと思う。お年寄りの方は自分がずっと生きていると思っている。個人的には、会社経営のようにある程度の年代になったら自分の後継者をつくっておけばよいと思う。自分がいなくなったときのことを考えていないため、今までと同じ経営ができなくなる家が多い。農家の意識を変えて、自分がいなくなった後どうするのかという教育が必要である。私が農業を始めたころは、若い女性の意見を聞き入れてもらえなかった。やはり私も年をとってきて、次の世代に何とかつないでいきたいと思っているが、次につなげることはなかなか難しい。先ほど農地が見つからないと言ったが、耕作放棄地は山ほどあると思うが、条件がいい農地は手放さないし、何とかなくなってしまふ。何とかなれば別に構わないが、目先のことを変えただけでは先が続かない。農家の意識を変えていかなければ、いつまでたっても大きな川のように流れていかないと思う。

出席者) 今、現役世代が70代後半で、息子さんたちはやる気がない。やはり責任を持って、今後どうするのかということをしっかり考えなければいけない。そのときになったら考えると、いざ旦那さんが亡くなってみて「どうしよう」となっている方も多い。実際若くして旦那さんを亡くし、今高齢で頑張っているおばあちゃんも、もう限界で、それでも行政にSOSを出さない感じは、昔ながらの気の強さがある。それなら、こういう新規の方がいらっしゃるなら貸してみようとか、何とかつなげようという努力が自然にできるような情報があれば良いと思う。それから、やはり世の中が男性社会なので、どの会議に行っても女性が1人である。農家の奥さんは働き者で、男性以上に働いているが、もう限界だと思う。女性はかなり無理してやっていると声が届いていないと感じている。やはりSOSを出す環境が女性にもちゃんとほしい。

出席者) あくまでも経営者という自覚のない方は、新規の人に貸すという制度を知らない人がいる。その制度を知っていてもやはり昔の農家の人は、土地は末代まで残すという思いがある。それでも、農地を草だらけにしてはいけないと思い、貸す人を見きわめて貸している。主人たちはコミュニティーの中で、新規の人たちが農地を借りられるようにしているが、新規の人たちは、条件の良い畑を要望するので、桃畑があいでもやらない。今ある蓄えの中でやっていくので、みんなお金が儲かるものやりたい。要望や自分がやりたいものを突き詰めたいということもわかるが、まずここからやりましょうと、そうしたら地域が見えてくる。どこに行っても何をやろうとしても、大変なことはわかるんですけど、新規の人は、要望するだけじゃなくて、それは大切なことかもしれないんですけど、親子間でやっている農家の人も苦戦している。だから、みんなが苦労している中で、新規の人も今度家族経営で主となって、次の子供たちに伝える立場の人たちなので、そういう人たちに援助があるのは本当にいいことだと思うが、新規だけじゃなくて、今まで家族経営をしている私たちも同じように苦労して頑張っているのだから、農業だけではないが、いろいろ考えてもらいたい。

出席者) 私は、先に夫が山梨に来ていたが、なかなか農地が借りられなかった。農家が減っていると聞いているのに、なぜだろうと思っていた。実際、自分も来てみて思ったのは、いつ東京に戻るかわからない人に大事な土地を貸せないということ。だからといって、私が一緒にやりますと言ったところで、すぐに信用してもらえないものでも

ない。ただ、実際問題、あいている土地が見受けられるのも確かで、逆に突然できなくなった農地があっても、そういった土地はすぐに埋まってしまって、なかなか新規の人には回ってこないのが現状。新規の人は、やはり仕事をやめてきて、何年も収入がないというのも現実。土地があるのであれば、なるべく成園として貸し出せる状態で整えてもらえる仕組みがあればいいと思う。実際、自分たちが山梨に引っ越してきて、東京の知り合いから聞かれたりする。もちろん山梨県や甲州市で、こういう支援制度があるとか、私も農業大学校に通っていたので紹介をした。しかし、何年もかかることなので、なかなか二の足を踏んでいる人が多い。一言で何を一番求めますかと言われても、はっきり出てこない。私も、もう少し農地をふやしたいという気持ちはあるが、これ以上、苗を育てる土地ばかりふえて、草刈りの手間が掛かる。今はそんな状態で農業をやっている。

出席者) 産地パワーアップ事業のことで、昨年、巨峰に掛けるトンネルメッシュの簡易雨よけの申請をしたが、今はシャインマスカット限定になっていた。その後、2月に追加募集があったので、再度申し込んだが受け付けてもらえなかった。そして、ことし借り入れた畑に5年生くらいシャインマスカットの成木が1本あり、微量ながら出荷ができるので申請した。その事業は、シャインマスカットの収入が10%アップすることが条件であったため、私たちの出荷量がゼロだったから少し出せばふえると言ったが、もとの数字がゼロだと、10%という数字が出ないので、だめだと言われた。シャインマスカットにも、もちろん雨よけはしたいが、ことしの7月みたいに雨が多いと、守るべきは巨峰ではないかと思って、牧丘は巨峰の里でもあるので、今だんだん牧丘でも巨峰を切ってシャインマスカットにしている方が多く、共選所のレーンもシャインマスカットの出荷レーンがふえている。産地パワーアップ事業なのに、巨峰の里の巨峰がどんどん少なくなっていくのはどうなのかと思う。巨峰にもかけられるようにしてほしい。

出席者) 就農する前に、県の農業大学校の週末農業塾から職業訓練農業科に行き、さらにアグリマスター研修を受講した。こんなにしっかり教えてもらえることに驚き、とてもうれしかった。また、こういった場に参加できることになったので、問題意識を持って営農しなければと思い、ことし1年を振り返ってみた。就農してから畑もふえて、今では自分一人では大変な面積になってきた。行く行くはもっと大きな面積も管理できるような農家を目指しているため、年間で雇用したいと考えている。雇用の問題はとても難しい。ことしは練習のつもりでシルバーさんに来てもらったが、最も人手が欲しいと思っていた桃の収穫時にはお願いできなかった。消毒と桃の収穫に関しては、やはり誰にでもできる作業ではない。例えば年をとってきて、自分一人で管理するのが大変だけれども、技術がある農家さんに新規就農者が教わりに行けるようなマッチングがうまくいくといいと思う。

もう一点、農地の確保について、借りたいと思った土地の地主が分からなかったため、農地中間管理機構に問い合わせたが、情報がなく、意外に中間管理機構が利用されていない。それから、別の畑が相続になって地主が県内にはいないというような耕作放棄地がある。これもやはり中間管理機構に委託されていればと思って連絡をしたが、地主と借り手側と農業委員さんで話をしているとされた。新規就農者が地主や農業委員と話をするのはハードルが高いため、そういう交渉してくれるのが中間管理機構だと思っていたので、ちょっと違うと思った。

議員) 今お話を聞いている中で、休耕農地について、皆さんの要望があることがわかった。私の地域も田舎だが、休耕農地を借りる場合、市が責任を持って、地主さんと話をして借りられるような仕組みになっている。貸す側も市に貸すのであれば安心し

て貸せるという判断をしている。こういったことが、やはり私ども委員の仕事かなと思っておりますので、今後とも一生懸命頑張りますので、どうかよろしくお願いいたします。

議 員) 産地パワーアップ事業のトンネルメッシュの要望が出たが、確かにシャインマスカットで計画を立てた事業であるため、黒系ブドウは対象外ではありますが、今検討して品種を広げられるように調整している。そういう意見をどんどん言ってほしい。

議 員) 移住された4名の方は、なぜ、山梨で就農されたのか。

出席者) 主人が、農業をやりたいと言ったときに、本人もまだどこまで形になるかわからないことや、私自身も勤めていたので、週末に帰ってこられるところで探した。農業大学校もきっかけの一つだった。

議 員) つまり、東京に近かったということか。

出席者) そうである。農大のようなところをあと3箇所見に行ったが、やはり生産したものを販売していくに当たっても東京に近いところがいいということで、山梨を選んだ。

議 員) 距離の近さと、フォローアップみたいなものか。

出席者) 農大の職業訓練農業科果樹コースにお世話にはなったが、あのコースは大変いいと思う横のつながりもでき、研修先も紹介していただき、県外から来た人ばかりではなく、農家の跡取りの方が多くて、そういった話も聞ける。それから、私は果樹のコースでブドウと桃が中心だったが、満遍なく1年間、もうちょっと長くてもいいくらいと思ったが、そちらを選んで行けたのは大変よかったと思っている。

出席者) 私たち家族は、山梨に来る前は山形県に住んでいた。昔からいずれは農業をしたいと思っていた。山形ではサクランボとかリンゴ農園へアルバイトに行ったり、農業生産法人で働いたりして、やはり農業をやるんだったら果樹農家がいいと考えていた。それで、山形か山梨で迷っていたが、主人の仕事が東京によく行く仕事だったので、東京から近い山梨に移住した。移住する2年ぐらい前から家探しをしたり、空き家バンクを小まめにチェックしていたが見つからなかった。それで、たまたま牧丘のブドウ農家さんを紹介されて、牧丘に来たときに牧丘の景観や環境がすごくいいと思い、牧丘で家を探した。縁があって、たまたま見つかったところに移住して、それから県の方に相談したり、農大に行って職業訓練を受けた。農大はすごくよかったと思う。

議 員) 牧丘を紹介してくれた方はどんな方か。

出席者) 高尾にいる2人の友達に、山梨で農家をやっている人を知らないかと聞いたら、2人とも有機野菜を作っている同じ方を紹介してくれて、その方の先輩に牧丘でブドウ農家をしている人がいるということで紹介された。

議 員) 行政ではないのか。

出席者) 違う。

議 員) 移住されるときは、東京にある山梨移住センターに行ったのか。

出席者) 行っていない。

議 員) 情報は自分で集めたのか。

出席者) はい。

出席者) 仕事をやめたのをきっかけに、夫婦でよく話し合っ、ブドウ農家がいいという話から、ブドウといたら山梨だよねということになり、主人がいろんな県の制度を見て比較して、山梨県の支援制度がとても充実していたので山梨に決めた。さらに、職業訓練農業科の果樹コースがあったのが、山梨の農大だけだったので、それも大きいきっかけとなった。この職業訓練にはとてもお世話になった。

出席者) 私も職業訓練農業科がなかったら決心できなかったと思う。夫はふるさとに帰って景色を守りたいとかいろいろな理由があったが、自分としては全く農業に興味がなく、観葉植物も枯らせてしまうような自分がとてもできるとは思っていなかった。たまたま夫が国家公務員で、山梨に戻ってこられたこともあって、週末農業塾や職業訓練農業科に通って、2軒の農家さんのところに期間雇用と通年雇用でお世話になり、ようやく決心がついた。夫の夢を応援している自分の姿を子供に見てもらいたいという気持ちもあり、頑張ってみようと思って来た。

議 員) 皆さんの話を聞いていて、女性が農業を支えているということを改めて思っ。そして、堀川さんや荒木さん、風間さんが言っていることは、すごくよくわかる。きつこうしたらいいではないかという危機感を持っていて、将来どうなるんだろうとか、息子が継いでくれるのか、周りの畑がどうなのかというのは、本当に女性のほうが考えている。それを受けとめる方たちがなかなかいないということもすごくわかって、思わず大きくなずいていた。同時に、新規の方々の気持ちもわかる。今までのお話を聞くと、アグリマスターとか新規就農とか、山梨県はほかの県に比べてすごく手厚くやっていることを改めて気がついた。しかし、いざ就農となると、大きなハードルがあるということも今わかった。どちらかという果樹は技術が必要で難しい。種をまいたらすぐできるわけではなく、何年かたたないと物がとれないので、それなりにやはり新規就農の方々も何年か先を見越してお金のことや拡大のことがあると思う。その中で、せっかくいい土地を見つけて頑張ろうというときに、大きな壁があるっていうのは、すごくわかった。やはり女性の方たちの声を聞いて、例えば普通の会社や事業所が事業承継をやっている。農家の方々も10年後、20年後どうするかという個人のプランをつくと同時に、農協なのか地域なのかわからないが、こういうプラン、こういうふうを考えるんだよということを、提起したり、スケジュールみたいなものを提案することが必要ではないかと思う。マッチングをすれば、新規就農の方も頑張っていらっしゃる方も、お互いにプラスになると思う。確かに、土地を手放したくない、絶対に貸さない、という声はどこからも聞いている。反対に貸して欲しいという人もたくさんいる。そのマッチングや橋渡しのアプローチが行政からなかったのか。

出席者) 新規の人たちがすごく立派過ぎて、さっきの私の発言を撤回したいぐらい、すばらしい人たちが集まっている。多分この人たちが農家を繁栄させていくんだろうな



と思っし、実際、研修していた人が、今は農大生を受け入れる側になっている。そのスパンがすごく短い。だから、マッチングは、結局は廃れていくもので、農大のシステムがいいとか、山梨の農業に対しての支援制度が進んでいるという話を聞いて、おかげさまでこんなすばらしい皆さんがいるんだなと思った。だから、マッチングというより、やる気のある方への支援制度で十分だと思う。

出席者) 甲州市農林振興課に、受け入れてくれる農家さんのグループや、アグリマスターの登録がある。それから、新規の方が研修を受けたいということで、グループのところで受け入れるというシステムもある。新規の方を一回グループとして受け入れて、そこでよければみんなで農地を探してあげて就農してもらおうというシステムもあるが、市と県のシステムが似ているため、どちらがいいかといったらみんな県のほうへ行ってしまう。市と県が同じようなシステムではだめだと思う。

私が、新規の人に言ったのは、就農研修が終わった後もこの地域だったらずっとつながっていき、お金じゃ買えないものがあるということ。新規の人はやはり憧れが半分あって、農大とかに行っていない人は、やはり県のほうがお金ももらえるということで、研修先もかえてしまった。私たちは、そういう人を育てて、メンバーのおじさんたちも、「俺の畑がだめになったら、おまえにやってもらいたい。」という気持ちがあって、育てていくには10年ぐらいかかることもわかっているから、今のうちからつながっておけば、やたらの人には貸せないけど、やってくれる人にはぜひ頼みたいという、そういういい条件も出したが、県の制度を選んでいった。その制度が、市と県でバラバラなので、新規の人が後々困らないようにサポートしていかなければいけないので、うまく県と市町村の制度を両方使えればいいと思う。

議員) 話を聞く中で、やはり新規の方は、アグリマスターとか研修をしている近くで就農したほうが、話もわかるし、地域のこともわかって見えてくると思う。また、受け入れる方々もそういう方であれば、受け入れやすくなり、「次にこの畑を任せたいからやってみたら。」という話ができるのではないかと思った。新規就農者と受入農家が、それぞれ別々に窓口へ行くよりも、最初から面倒を見てもらうというシステムがあればいいと思う。

もう一点、人手不足を解消するために、何かこうしたら集まるんじゃないかという、何か具体的な案があれば教えてもらいたい。

出席者) 県内の3つの団体で取り組んでいる「いいさよ～山梨」というところに行ったが、やはり、自分が欲しいという時期には、ほかの方もみんな欲しいわけで、忙しい時期がみんな一緒になる。結局、該当の方はいなくて、近所で偶然見つかった。そういうところもやはり人材が少な過ぎるし、収穫の忙しい時期に収穫できる人がいない。収穫できる技術を持っている人は、自分で畑を持っていて自分で農業をやっている。だから、何でもかんでもそういうところへ行けば人材がいるわけではない。

議員) 労働人口不足で、例えば建設業や観光業のように農業も、外国人の労働者、技能実習生がインドネシアなどから入ってきている。外国人労働者は、3年間本当に一生懸命で真面目に働いてくれているので、外国人労働者も非常に戦力だと思うが、いかがか。

出席者) ことしの早いうちから外国の方を紹介してくださいと言っていたが、新型コロナウイルスの影響で無理だと言われた。外国人労働者は、安い賃金でやっているというが、そうではなく、日本人が働いても外国人が働いても同じ賃金でやることは絶対に、農家の人たちは勘違いしていると思う。だから、山梨県として、例えば山梨県で

農業をしてくれる場合は、こういう賃金でやってくださいとか、こういう決まりですと決めて欲しい。外国人労働者の方たちにも応援してもらわないと、多分もう無理だと思うので、その人たちが将来農地を持ってもいいと思っている。

出席者) 近くの農地で、外国人労働者を雇っている団体がある。そこを見ている限り、日本と外国の働き方が違う。日本人の農大生みたいな研修実習生という立場であればいいと思うが、やはりお金をもらっているのも、その辺がクリアできればいい制度であると思う。

出席者) 旅行仲間の中に、フルーツピッキングというアルバイトをしながら、オーストラリアとかニュージーランドとかに行き、サクランボ採りをした後は、今度はノルウェーに行きリンゴのバイトをするという人がいる。だから、私は、通年働いてもらわなくても、忙しいときだけ人手が欲しいので、期間限定のビザみたいなので働いて、そのまままた次の場所へ行っていただくという制度があればいいと思う。

あとは、自分の集落に空き家を借りて、そこにいろんな方が寝泊まりしながら手伝いをしてもらう制度がある。あいているお家がいっぱいあるので、そこを宿泊施設やシェアハウスのように使って、忙しい時期だけでも人を呼べたりすると思う。

出席者) 私も就農初年度に桃の着色をよくするために、タイベックというのを畑に敷くが、その上に近くの農園で働いているタイ人の方が勝手にレジャーシートを敷いて休憩していた。女性一人でやっている畑ということがわかっていたと思う。桃の着色をよくするためにずっとつけておきたいものなのに、私がいなくて勝手に入ってきて、たばこを吸ったりごみを捨てたりしていた。タイベックというのは紙の素材なので、たばこの吸い殻で引火するかもしれない。すごく嫌な思いをした経験がある。

海外労働者を安く雇うとモラルに欠ける部分があるように見受けられた。だから、雇う側にちゃんと責任を持って管理してもらいたいと思う。

議員) 山梨県も昨年まで外国人材受入支援課があって、きちんと農業のことを母国で学んで、山梨に来てもらうというスタイルを紹介していたり、県営住宅にも外国人が入れるようになった。外国人用の民生委員もいるので、活用していただきたい。しっかりと賃金を払うと、非常に戦力になると思う。

出席者) その外国人労働の制度は、法人は使えるけど、個人は使えない。

議員) 民間に技能実習生を扱う協同組合があるので、そこに入れればいい。

出席者) 組合に入ることか。

議員) そう。

議員) 青森県、神奈川県など他県から山梨県の農業に情熱と信念を持って取り組んでいただいていることに感謝する。さまざまな話を聞き、皆様の御苦労が分かった。皆様方のそうした努力が報われるような県、国の支援が、もうかる農業への一番大きな流れになると思う。是非、女性の方で農業、山梨の農業を盛り立てていただきたい。

特に担い手不足は、新型コロナウイルスの感染拡大の状況もあり、非常に難しい年である。それから天候不順も重なり、非常に御苦労されている中で、なお頑張っているのを聞いて、もうかる農業、山梨の農業、そしてまた山梨が第二のふるさととしていた

だいて、山梨の農業をこれからもさらに前進をさせていただきたい。私たちも非常によい機会をいただいた。これからの議会活動、委員会等に活用させていただきながら、県へもしっかりと皆様方の気持ちを伝えていきたいと思っている。

そして、日本の企業でもそうだが、これからの外国人の同一労働・同一賃金、といった条件の中で、やはり農業は特に厳しい状況であるため、ぜひ支援をさせていただきたいと思っている。



※ 東山梨合同庁舎にて意見交換会を実施した。